

江川真嗣（えがわ・さとし）は、1989年島根県生まれ。2013年、武蔵野美術大学通信教育課程造形学部油画学科卒業、初個展がこのステップスであった。

画廊内は約20×15cmの作品を11点程度並べ、事務所に8点の小品を展示した。タイトルの殆どは《おかあ》であり、紙に鉛筆、水彩、アクリルを素材とする。顔の輪郭、内部には様々な風景が描かれ、顔の背後には、風景と全く関係がない背景が描かれている。丁寧に描きながらも、筆の勢いを忘れていない。

それはダリやマグリットといった超現実主義のアーティスト達の思想とは異なる。シュルレアリストは、愛と詩と革命を標榜した。

江川のタイトルの「おかあ」から、予科練を思い起こすことも問題はないであろう。第二次世界大戦時、少年であるにも関わらず、海の藻屑と化した事実。しかし私は、江川はもっと広義な主張を行なっているのではないかと思う。顔の輪郭、内部の風景、背後の景色といった三つに目を向ける。

すると、三つの印象が互いに入れ違っていくではないか。ダ・ヴィンチ《モナリザ》はモナリザと景色という二つの次元が増える。

江川の場合、三つであるからこそ、この三つを乗り越えて別のイメージが良い意味で派生しない。限定された空間内で、自在に展開するのだ。

それが単なる図像に陥らず、描く技法を多様化している点に注目すべきだ。図版上は顔の輪郭は線描、中は盛り上げ、背景は垂らし込み的技法を用いている。

そのような技法の追求は、図版下の抽象を見れば研鑽を積んでいることが理解されるはずだ。これから楽しみである。

